

事業承継を機に、 伝統の日本瓦を全国へ

高橋製瓦(株)は、昭和25年に屋根工事業として創業しました。以来、初代・二代目と優れた職人技で数多くの屋根を手掛けてきました。しかし近年、屋根瓦の市場は年々縮小傾向にあります。更にコロナ禍の影響も加わり、厳しい経営環境が続いています。

そのなかで2020年5月、三代目社長に就任した高橋秀太さん48歳。日本の瓦業の伝統と技術を絶やさぬよう自ら存続させた「美山瓦窯」(みやまがよう)で、新たな挑戦をはじめました。



高橋製瓦株式会社
社長 高橋 秀太さん(左) 会長 高橋 陽一さん(右)

移りかわる日本の伝統産業 夢は「うちの瓦」をつくること

秀太さんは、二代目高橋陽一さんの次男として、幼い頃より屋根工事業の背中を見て育ちました。職人は格好いいと思うなかで、ひとつの疑問がありました。それは「うちの瓦屋さんのなに、なぜ瓦を作っていないのだろう」ということでした。

その疑問に対する答えは、いつしか秀太さんの「夢」となりました。「いつかオリジナルの瓦を作って製造から工事まで一貫して手掛けたい」そんな思いが日に日に募っていき

ました。大学卒業後は、家業に入るのではなく日本茶の製茶販売会社に就職しました。日本茶は、栽培から製造まで古くからの方法を頑なに守り続け

ています。しかし、コーヒーやジュースなどの嗜好品の多様化により、日本茶葉の消費量は右肩下がりで減少していききました。ある日のこと、日本茶の現状を父の陽一さんに話したところ、父から「日本瓦業界も同じで消費者離れが起こっている」と聞かされました。住宅の洋風化やスレート材・金属屋根材といった新建材の登場、マンション・アパートなど集合住宅の増加さらに近年は洋瓦に押されて、古くからの日本の和瓦は年々販売量が減少しているのです。

以来、秀太さんは「日本茶も日本瓦も、古くから続いている日本の伝統文化。この業界に携わるものとして後世に繋げていかなくては」と、家業を継承していく自分の役割を徐々に感じるようになりました。

その後秀太さんの兄、長男の陽介さんが高橋製瓦(株)に入社。2010年に社内で新規事業となるペーパー製造部門「CURIO」を立ち上げ、これまでの建設業とは全く異なった事業を展開しはじめました。2017年には分社化して「株式会社CURIO」としてペーパーカーだけでなく、自転車や電動カーゴの製造販売を手掛け、事業の幅を広げています。

そんな兄の姿を追うように、2012年に秀太さんも入社を決意。「日

岐阜から発信 新ブランド「美山瓦窯」

2012年自社に復帰した後、屋根建設業の現場を一通り経験。2020年5月に先代より事業を承継し三代目となりました。

社長に就任するにあたり、真っ先に取り組むことがひとつありました。師匠の五十嵐さんには後継者が不在のため、「達磨窯瓦」はいつでも日本国内から廃れてしまう可能性があります。

「自分の手で、達磨窯瓦を 存続させたい」

その想いを達成する足掛かりとして、昨年、事業再構築補助金の採択を受けて、新規事業として山県市に達磨窯と工房を建設することになりました。しかし、大きな問題が発覚しました。かつては窯築師とよばれる専門の築師が窯を作っていました。今では一人もいなくなっていたのです。そこで奈良県在住の陶芸窯の築師や、三河や岐阜でかつて達磨窯に携わった数少ない経験者からの聞き取り、また過去の書籍を参考にするなどできる限りの力を尽くし築師に取り掛かりました。

窯の天井が落ちるなどの困難もありましたが、日本で唯一の達磨窯を研究されている関西大学で教鞭をと

本の伝統的な産業を大切にしながらも、新たなチャレンジが必要だと、兄とは違った秀太さんならではの日本瓦の展開を考えるようになりました。

日本伝統の達磨窯瓦

瓦は6世紀に仏教の伝来とともに朝鮮半島から伝わりました。日本瓦は粘土を材料に焼成した瓦で、その代表のいぶし瓦は、古くから残る城や寺社にも多く使われています。そのいぶし瓦を焼くのに最適な窯として室町時代後期に畿内を中心に普及したのが「達磨窯」。両側に焚口と燃焼室、中央に瓦を焼く焼成室があり、その形が、達磨さんが座っているように見えることから「達磨窯」と呼ばれています。地上で平らな場所に設置できることから、昭和30年代までは日本各地に日常的な風景としてひろがっていましたが、現在ではそのほとんどが姿を消しています。



左: ガス窯で製造された瓦 右: 達磨窯瓦

られた藤原先生の助言もあり、今年2月に窯は無事に完成。初窯の披露には、五十嵐師匠をお招きすることができました。

秀太さんは、この達磨窯で作る瓦を「美山瓦窯」と名付け、オリジナルブランドとして展開していきます。

「美濃地方には、瓦の材料となる最良の土、燃料となる杉が生産されています。いずれは、オール岐阜による地産地消の瓦を全国に発信していきたいです」

夢をかなえた秀太さんに、次なる目標ができました。

「いつの日か、文化遺産や現代の数奇屋の屋根を、美山瓦窯で飾りたいです」

達磨窯瓦の後継者、秀太さんの挑戦は岐阜・美山から動き出しました。

高橋製瓦株式会社
所在地 岐阜市城東通2-36
TEL 058-271-7301
FAX 058-271-7318



窯の火を確認する師匠の五十嵐清さん

師匠 五十嵐清さんとの出会い
2010年、あるテレビ番組で達磨窯瓦の特集が放映されました。番組では、現在も日常的に達磨窯で瓦を製造しているのは、群馬県藤岡市にある共和建材(有)の五十嵐清さんただ一人。その五十嵐さんが製造した瓦は、2008年に成田空港内の「アート散歩道」に展示されるなど高い評価を得て、納品までは「1〜2年待ち」などと紹介されていました。この番組をみていた秀太さんは「この人から瓦について教わりたい」という強烈な思いを抱き、すぐさま自らの瓦への想いと弟子入りへの熱い意思を手紙に書いて送りました。五十嵐さんからは「1年だけなら」との返信があり、秀太さんは五十嵐さんのもとで瓦製造を一から学びはじめました。



高橋製瓦の焼成温度は900〜1000℃と高温。火を入れて24時間は、ずっと付きっきりで火の様子を見ていなくてはなりません。焼く前の瓦は一枚一枚天日干しにして窯詰めを行い、焼いた瓦を手で取り出して窯出し検品と、全てが手作業です。窯内では、高温の火によって大量に燻された杉の煙が、瓦の内部へ「浸炭」することで内部に層が形成され耐久性や防水性が増します。焼きムラや模様は、独特の色合いや風合いが醸し出されるため、近頃は屋根瓦としてのみならず、壁や床などにファッション的に用いられることも増えてきました。

「日本瓦は、民芸みたいなもので、その土地の特性とその職人の手仕事の美しさが製品に反映されます。一枚一枚焼きムラが異なるため作り手の顔が見えてくる。だからこそ、やりがいもあります」

秀太さんは、約束の1年間で過ぎる頃には、確かな手ごたえを感じていました。

美山瓦窯

